

令和5年度病虫害発生予察注意報第7号

令和5年8月1日
愛知 県

作物名：イチゴ

病虫害名：イチゴ炭疽病

- 1 発生地域 県内全域
- 2 発生程度 多い
- 3 注意報発表の根拠

(1) 7月下旬に県内26ほ場で行った巡回調査（育苗ほ場）の結果、発病株率は1.69%（平年0.54%、前年1.19%）と過去10年間と比較して2番目に高く、発生ほ場率は30.8%（平年13.9%、前年30.8%）で、前年、前々年と同様に過去10年間と比較して最も高かった。

(2) 令和5年7月27日名古屋地方气象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の気温は高いとされており、本病の発生に好適な条件である。

- 4 本病の生態等

(1) ランナー、葉柄、葉などに病斑が発生する局所的な症状と、株が萎凋枯死する全身症状（図1）がある。ランナーや葉柄に発生する病斑は長径3～7mm程度の黒色、少し陥没した紡錘形または楕円形（図2）で、症状が進行すると先端部が枯死する。また、多湿時には病斑上に鮭肉色の粘塊状または粉状の分生子層を形成する（図3）。葉に発生する病斑は、直径2～3mm程度の汚斑状である（図4）。



図1 全身症状（萎凋症状）



図2 葉柄の病斑



図3 病斑上にできた鮭肉色の分生子層



図4 葉の病斑

(2) 本病の病原菌は糸状菌である。生育適温は 25℃～30℃、生育温度は 10～35℃と高温の時期に発生しやすく、雨水やかん水などの水滴に混じって分生子が飛散することで感染が広がる。

5 防除対策

- (1) 発病株はすみやかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。発病株の周辺にある株は病徴が無い場合も同様に抜き取り処分する。なお、親株で発生があった場合は、その親株から発生しているランナーと子株も同様に処分する。
- (2) 泥はねや水滴による病原菌の飛散を避けるため、かん水は水滴の小さい装置や底面給水を利用する。過湿を避けるため、苗は十分な間隔を置いて並べる。
- (3) 下記の表を参考に、予防散布する。なお、愛知県において、QoI 剤（FRAC コード：11）に対する耐性菌の発生を確認しているため、本病に対して使用することは控える。耐性菌管理のため、殺菌剤の耐性リスクの高い薬剤は連用を避ける。予防散布を行ったにもかかわらず、発生の多いほ場では、耐性菌の発生が疑われるため、他系統の薬剤を使用する。
- (4) 風雨により発病が助長されるので、降雨後は速やかに防除を行う。
- (5) 定植には発病株や発病が疑われる株は使用しない。

表 イチゴ炭疽病に対する主な防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	本剤の使用回数	FRAC コード	殺菌剤の耐性リスク
アントラコール顆粒水和剤	プロピネブ	仮植栽培期	6回以内	M3	低
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	仮植栽培期 但し収穫76日前まで	6回以内	M3	低
オーソサイド水和剤80	キャプタン	収穫開始14日前まで	5回以内	M4	低
ベルコートフロアブル	イミノクタジン アルベシル酸塩	育苗期(定植前) 収穫前日まで(生育期)	5回以内	M7	低
デランフロアブル	ジチアノン	育苗期	2回以内	M9	低
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・ チオファネートメチル	収穫開始21日前まで	3回以内	10, 1	高、高
ニマイパー水和剤	ジエトフェンカルブ・ ベノミル	収穫前日まで	3回以内	10, 1	高、高
セイビアーフロアブル20	フルジオキシニル	収穫前日まで	3回以内	12	低～中

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コード及び殺菌剤の耐性リスクの詳細は、

https://www.jcpa.or.jp/assets/file/lab0/mechanism/code_pdf01_2022.pdf を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

6 連絡先

愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室

電話 0561-62-0085 内線471